宮崎県都城市の言語動態
ー言語形式とアイデンティティーー

早 野 慎 吾
(宮崎大学)

1．はじめに

東條(1954)では、宮崎県方言を豊日方言に属する日向方言と薩摩方言に属する諸県方言とに大きく区画している。この区画は、その後の地域差に関する調査報告からも実証されており、現在では一般的なものとなっている。宮崎県方言の地域差に関しては、大規模な実地調査の研究報告がいくつかあり、かなり概観できるようになった。九州方言学会編(1969)では九州全域で 170 地点(宮崎県は 22 地点)、212 項目に及ぶ実地調査の結果が報告されており、宮崎を含めた九州全域の地域差が把握できる。宮崎国際大学地域言語研究会編(1998)では、宮崎県の全市町村 119 地点、81 項目の言語地図を報告している。

地域差に対して世代差に関する調査報告はほとんど行われていない。加藤・松永編(2003)では、若年層(中学生)と中年層(その保護者)を対象とした通信調査による結果 30 項目が報告されているが、調査方法と項目の少なさから世代差の状況を知るには不十分である。

このような状況において、宮崎地域言語研究会では、より詳細で体系的な言語動態を記述するために、2005 年に諸県方言に属する都城市の世代差調査(以降、都城調査)を行った(注1)。早野他(2006)では、その都城調査の結果を早野(1996:p.70, p.106-p.108)の手法を用いてパターン分類した。そこでは、特徴的な言語変化のパターンが観察できたが、そのひとつに混交形(mixture form)の発生パターンがある。特に推量表現においては、標準語形や東京語形との混交形だけでなく、関西方言形や日向方言形との混交形も観察できた。それらのバリエーションの使用状況は、話者の志向性やアイデンティティと大きく関係していると考えられる。北関東の調査では、伝統方言形や東京語形の使用状況は話者の志向性と大きく関係していた(早野 1996)。志向性とは自己のアイデンティティを何に求めるかということである。本稿では、都城方言における推量表現のバリエーションを話者のアイデンティティと絡めて考察する。

2．調査概要

都城調査は 2005 年 6 月から 8 月にかけて行われた。調査方法は面接調査で都城市全域(調査当時)で行った(注2)。都城市を 11 の地域(西岳・庄内・志和地・横市・沖水・五十市・小松原・祝吉・姫城・妻ヶ丘・中郷)に区画し、各地域からなるべく均等に 10 代ー 70 代の各世代で男女 1 名ずつ選定するように心がけたが、地域的に調査できなかった世代・性もある。人数としては 10 代 26 名・20 代 22 名・30 代 17 名・40 代 24 名・50 代 25 名・60 代 9 名、70 代 11 名の計 134 名(男性 78 名・女性 56 名)である。今回の調査では 60 代と 70 代の人数が少ないので、60･70 代として、まとめて提示する。調査項目は音声・

音韻項目 169 項目、文法 23 項目、語彙 113 項目であるが、今回は、推量表現に関わる3項目の調査結果を利用する。

3．術語について

方言、標準語、共通語という術語は広い意味で使用される。本稿では、多義性による誤解を防ぐために、これらの術語を早野(1996)にしたがい、次のように定義する。

「標準語」とは、あらたまった場面で使用される、もしくは使用を前提とする談話スタイルのことである。つまり、スタンダード(standard)な言語スタイルではなく、フォーマル(formal)な言語スタイルのことである。「方言」とは、くだけた場面で使用される、もしくは使用を前提とする談話スタイルのことである。つまり、カジュアル(casual)な言語スタイルのことである。「共通語」とは、地域や年齢などにより区分される社会集団において共通に、もしくは多数に使用される言語要素のことであり、体系としての標準語、方言と区別する。

筆者は体系と要素を明確に区別する立場をとっており、方言の特徴的な要素を方言形、標準語の特徴的な要素を標準語形と表現する。高年層で使われている方言形を伝統方言形、若年層に向けて使用率が増えている方言形を新方言形、かつては新方言形であったが、既に使用率が減少してきている方言形を中興方言形(井上 1994)とする。

4．混交形の発生

推量表現においては、茨城県玉造町方言や千葉県松戸市方言においても、特徴的な混交形が観察できている。玉造方言においては、「もうこのくらいで切り上げて良いだろう」の下線部の表現形が、次のように変化してきている(早野 1997)。

ヨカッペ(ー)　→　イカッペ(ー)　→　イーベ(ー)

ヨカッペは伝統方言形である。イカッペはヨカッペとイーダロー(標準語形(東京的))との混交形である。イーベはイーダローの影響をさらに受けた混交形である。形容詞に助動詞ベ(ー)が接続する場合、茨城伝統方言ではヨカッペ、タカカっペ(高いだろう)のような形式が使用されているが、新しい方言ではイーベ、タケーベなどのような終止形にベ(ー)が付く形式が使用されている。この形容詞終止形にベ(ー)が付く形式は、標準語の影響を受けた混交形であり、いわゆるネオ方言形(真田 1993)である。このような例は福岡県福岡市でも観察できるようで、陣内(1988)ではヨカト／イイト(いいの)、タベンメ／タベンドコ(食べないでおこう)、タビョーヤ／タベローヤ(食べようよ)において、後者のような標準語形との混交形が優勢になりつつあることを指摘している。さらに、これらの現象について「あまり方言色の強くない、かといって共通語や東京弁ほど都会的でないものを共通のアイデンティティとしていることがあるのではないだろうか。」(p.81)と論じている。伝統方言形や東京語形の使用率には話者心理が大きく関係している(早野 1996)。伝統方言形や東京語形にもさまざまな性質を持つものがあるが、地域性の強い伝統方言形は地元に関する保守性と強く結びつき、都会的性質の強い東京語形は革新性と強く結びついている(早野 2002)。玉造の場合も、すべての若年層がイーベを使っているわけではないが、そのよう

な形式を使う話者心理としては、伝統方言形は田舎的で古臭いので使用したくないが、東京語形そのものは都会的で気どったイメージがあり使用しにくいという心理が働いていると考えられる。

また千葉県松戸市方言においては、地域的なアイデンティティではなく、性的なアイデンティティと関係した混交形も報告されている(早野 1996)。松戸市ではイーンジャン(良いだろう)、イクンジャン(行くだろう)などの～ンジャンが推量表現形として若年層の女性に好んで使用されており、使用率が急激に増加している。この～ンジャンは婉曲的な推量表現形～ンジャナイと東京新方言形～ジャンの混交形である。この～ンジャンについて、早野(1996)では次のように記述している。

> 従来女性は～デショーを使用していたが、～デショーは丁寧すぎて若い女性の好みに合わないようである。しかし、男性が使用している～ダローはぞんざいで使用しにくい。そこで使用したのが～ンジャンである。～ンジャンに限らず、現代女性の会話を観察していると丁寧すぎず、ぞんざいすぎない(つまり中間的な)スタイルを使用する傾向にあるようだ。この背景には女性の社会的地位や価値観の変化による女性の自立が関係していると考えられる。(p.126)

5. 都城方言の推量表現

5.1. 「良いだろう」

表1は「もうこのくらいで切り上げて良いだろう」の下線部を親しい友人には何というかを調査した結果である。

表1「良いだろう」を親しい友人には何というか (N = 134)

	10代	20代	30代	40代	50代	60･70代
1.ヨカガ	23.1(6)	22.7(5)	18.8(3)	33.3(8)	52.0(13)	50.0(9)
2.ヨカジャネ	0.0(0)	4.5(1)	6.3(1)	4.2(1)	8.0(2)	5.6(1)
3.ヨカワネ	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	12.5(3)	8.0(2)	0.0(0)
4.ヨカロ	0.0(0)	4.5(1)	31.3(5)	20.8(5)	12.0(3)	11.1(2)
5.ヨカヤロ	0.0(0)	13.6(3)	25.0(4)	12.5(3)	12.0(3)	11.1(2)
6.ヨカッチャネ	0.0(0)	0.0(0)	12.5(2)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)
7.イーガ	15.4(4)	4.5(1)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)
8.イーヤロ	11.5(3)	18.2(4)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)
9.イーンジャナイ	30.8(8)	9.1(2)	6.3(1)	0.0(0)	0.0(0)	5.6(1)
10.ヨクナイ	11.5(3)	13.6(3)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)
11.その他	7.7(2)	4.5(1)	0.0(0)	0.0(0)	4.0(1)	11.1(2)

( )外は%、NR は母数から除いて計算してある。　( )内は実数。

ヨカガ、ヨカジャネ、ヨカワネは伝統方言形である。都城の伝統方言ではヨカガが中心に使われており、10代でも約23%の話者が使用している。ヨカジャネ、ヨカワネは聞き

手に働きかける表現形で、ヨカワネの方が婉曲的である。ヨカロは文語的な標準語形であり、以前は教科書や新聞などの文章語が広まっていたことがわかる。ヨカヤロは伝統方言形と関西方言形(注3)の混交形である。この表現形は 30 代をピークに使用されなくなって来ている中興方言形である。ヨカッチャネのチャは日向方言の特徴的な伝統方言形であり、ヨカッチャネは都城伝統方言形と日向伝統方言形の混交形である(注4)。ヨカッチャネの使用者は 30 代女性に２名観察できただけであり、県庁所在地である宮崎市方言の影響は、この項目ではあまり強くない。イーガは伝統方言形ヨカガと標準語形(東京的)イーダローの混交により発生した新方言形である。イーヤロは標準語形と関西方言形の混交により発生した新方言形である。イーンジャナイは東京方言形で、都城方言ではもっとも優勢な新方言形である。今回の調査では、首都圏で観察できたイーンジャンの使用者は一人もいなかった。ヨクナイは形態的には標準語形であるが、東京新方言形の影響が考えられため、今回は東京方言形として扱う(注5)。これらの流れを図示すると次の図１のようになる。

古(高年層) ―――――――――――――――→ 新(若年層)

ヨカガ (伝統方言形)	ヨカヤロ (伝統・関西混交形)	イーンジャナイ(東京方言形)	高
		ヨクナイ (東京方言形)	
		イーヤロ (標準・関西混交形)	スタイル
	ヨカガ (伝統方言形)	イーガ (標準・伝統混交形)	
		ヨカガ (伝統方言形)	低

図１ 「良いだろう」に対応する表現の変化

都城方言では、ヨカガ、ヨカドのように終助詞を接続させることで推量を表現していたが、関西方言形のヤ(指定の助動詞)を使用して表現するようになっていった。これは、大方言(関西方言)化であり、鎌田(1981)のいう地方共通語化である(注6)。テレビを中心としたマスメディアが今日のように発達していなければ、この大方言化がさらに進行していったものと思われる。しかし、マスメディアが発達した現代では、地理的に近い関西よりも、東京の情報がはるかに多く地域社会に入り込んでいる。この東京からの影響を井上(1994)の雨傘モデルは適切に表している。東京の影響と関西の影響を受けた現代の複雑な状況を反映したのが若年層の言語状況である。

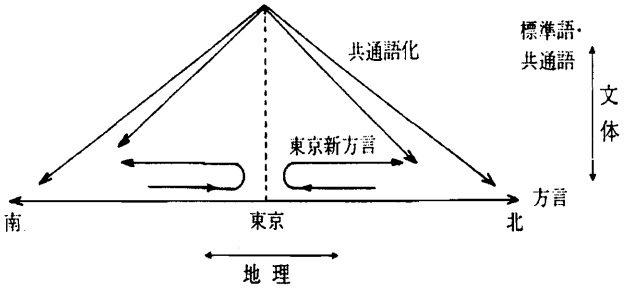

図２ 共通語化と東京新方言化(井上 1994:p.140)

5.2.「良いではないか」

表２は「もうこのくらいで良いではないか」の下線部を親しい友人には何というかを調査した結果である。この場合の「良いではないか」は反語による提案(もしくは確認)表現である。

表２「良いではないか」を親しい友人には何というか (N = 134)

	10代	20代	30代	40代	50代	60･70代
1.ヨカガ	7.6(2)	18.2(4)	37.5(6)	65.2(15)	64.0(16)	31.6(6)
2.ヨカジャネ	3.8(1)	0.0(0)	0.0(0)	8.7(2)	20.0(5)	36.8(7)
3.ヨカワネ	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	8.7(2)	12.0(3)	21.1(4)
4.ヨカヤロ	0.0(0)	4.5(1)	6.3(1)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)
5.ヨカッチャネ	3.8(1)	4.5(1)	31.3(5)	8.7(2)	0.0(0)	0.0(0)
6.イーガ	7.6(2)	9.0(2)	6.3(1)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)
7.イーヤロ	11.5(3)	13.6(3)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)
8.イーンジャナイ	23.1(6)	31.8(7)	6.3(1)	4.3(1)	0.0(0)	5.3(1)
9.イージャン	42.3(9)	18.2(4)	6.3(1)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)
10.その他	7.6(2)	0.0(0)	6.3(1)	4.3(1)	4.0(1)	5.3(1)

( )外は%、NR は母数から除いて計算してある。　( )内は実数。

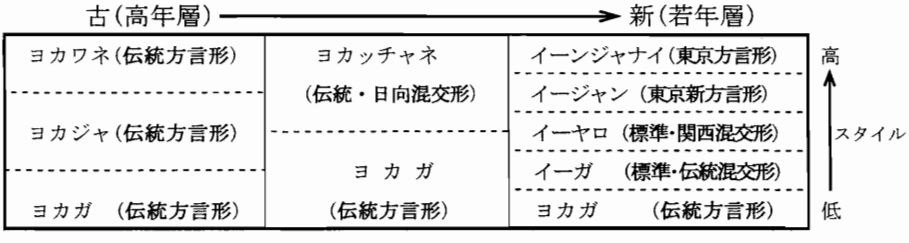

図３「良いではないか」に対応する表現の変化

60･70 代から 40 代にかけてヨカガの使用率が増加している。これは表 1 からもわかるが、ヨカガが当時新方言形であったのではなく、60･70 代、50 代においてはヨカジャネ、ヨカワネが併用されていたために回答が分散したのである。その後、40 代においてヨカジャネ、ヨカワネの使用率が減少して、使用語形がヨカガに統一されてきたため、60 代から 40 代にかけて使用(回答)率が上昇したのである。推量が中心的な意味であったヨカガが提案・確認の意味を兼ねるようになってきたのである。ヨカヤロ(伝統・関西混交形)は、このデータからも中興方言形であることが確認できる。ヨカッチャネ(伝統・日向混交形)は、30 代での使用率が高く、日向方言の影響も確認することができる。イーガ(標準・伝統混交形)、イーヤロ(標準・関西混交形)は表１の項目と同様に若年層で使用者が増加している。イーンジャナイ(東京方言形)が若年層で優勢になってきていることは表１と同様であるが、この項目では 10 代での使用率がやや低下してきている(誤差範囲では

あるが)。これは 10 代でイージャン(東京新方言形)が優勢になってきているためと考えられる。～ジャンが都城方言に急激に取り入れられていることが確認できる。これらの流れを図示すると図３のようになる。

5.3.「行くだろう」

表３は「太郎くんは明日学校に行くだろう」の下線部を親しい友人には何というかを調査した結果である。この場合の「行くだろう」は未来に対する推量表現である。

表３「行くだろう」を親しい友人には何というか (N = 134)

1.イッドダイ	0 (0)	0 (0)	0 (0)	12.5(3)	12.0(3)	27.8(5)
2.イッジャロ	0 (0)	4.5(1)	13.3(2)	41.7(10)	48.0(12)	44.4(8)
3.イッドジャネ	0 (0)	4.5(1)	6.7(1)	4.2(1)	12.0(3)	5.5(1)
4.イッヤロ	0 (0)	0 (0)	13.3(2)	12.5(3)	16.0(4)	0 (0)
5.イクヤロ	57.7(15)	72.7(16)	33.3(5)	12.5(3)	4.0(1)	0 (0)
6.イクジャロ	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	4.0(1)	5.5(1)
7.イクッチャロ	3.8(1)	0 (0)	0 (0)	4.2(1)	0 (0)	5.5(1)
8.イクデショ*	7.7(2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	5.5(1)
9.イクンジャナイ	23.1(6)	9.0(2)	33.3(5)	4.2(1)	0 (0)	0 (0)
10.その他	7.7(2)	9.0(2)	0 (0)	8.3(2)	4.0(1)	11.1(2)
	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60･70 代

( )外は%、NR は母数から除いて計算してある。 ( )内は実数。

* 10 代はイクダロの数値

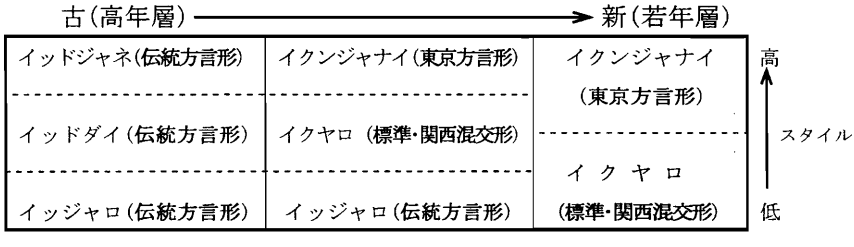

図４ 「行くだろう」に対応する表現の変化

イッドダイ、イッジャロ、イッドジャネは伝統方言形である。イッヤロは伝統方言形と関西方言形の混交形で、50 代から 30 代に使用者がいる中興方言形である。イッヤロのイッを標準語形イクに置き換えたイクヤロは若年層でもっとも使用率の高い新方言形である。表１・表２の項目において関西方言形との混交形は 20 代から 10 代にかけて使用率が低下していたが、この項目においては東京方言形よりも使用率が高い。どの項目かによって、東京方言・関西方言・日向方言による影響の度合いが異なっていることが確認できる。イクンジャナイ(東京方言形)は表１・表２の項目と同様に若年層で使われだしている。

この流れを図示すると図４のようになる。現在の若年層には関西方言の影響がやや強く出ているが、将来的には、この項目においても東京方言形の使用率が高くなってくると思われる。実際に 10 代における「その他」の２例も、イクミタイ、イクッポイで東京方言形である。複数回答があった場合、表には、もっともよく使用する表現形だけを提示しているが、その次に使用する形式として、東京方言形を回答した若年層話者も多い。

６．言語的バリエーションとアイデンティティ

今回の調査で確認できたバリエーションをスタイルによりまとめると８つに分類できるが、それらをスタイルの高い順に並べると以下の通りになる。

スタイル

高　１．**東京方言形**　：イーンジャナイ・ヨクナイ・イクンジャナイ、イクミタイ
↑　２．**東京新方言形**：イージャン・イクッポイ
　　３．**標準・関西混交方言形**：イーヤロ・イクヤロ
　　４．**標準・日向混交方言形**：イーチャネ・イクッチャロ
　　５．**標準・伝統混交方言形**：イーガ・イクジャロ　　**中間的スタイル**
　　６．**関西・伝統混交方言形**：ヨカヤロ・イッヤロ
↓　７．**日向・伝統混交方言形**：ヨカッチャネ・イッチャロ
低　８．**伝統方言形**：ヨカガ・ヨカワネ・ヨカジャネ・イッドダイ・イッジャロ・イッドジャネ

東京方言形は中央語としてのプレステージ(prestige)をもっており、もっとも高いスタイルと位置づけられている。標準語形として用いられることもある。テレビを中心としたマスメディアが発達したことにより、東京の日常語が都城にも急速に広まっていることが今回の調査から確認できる。東京新方言形は、東京方言の中ではスタイル的に低いが、中央語としてのプレステージと都会的な新しさを持っており、他地域の方言形よりも上に位置している。関西方言は、西日本の文化的中心地という東京方言に次ぐプレステージを持っており、結果として関西方言形は東京方言形の次に高いスタイルと位置づけられている。日向方言は宮崎県の県庁所在地(宮崎市)のことばである。都城市民には宮崎市に対抗意識を持っている話者も多いが、方言イメージを聞くと、都城方言よりも上品でやさしいと感じている話者が多い。日向方言を積極的に受け入れはしていないが、スタイル的にはやや上に位置していると考えられる。

現在の都城方言において、上記の１から８までのスタイルが混在していることが大きな特徴のひとつといえる。それらのスタイルは、地域社会において話者の志向性と大きく関係しながら使い分けられていると考えられる。ある言語形式を話者の意志で獲得し、使用することが可能な場合、その言語形式を使用するのは、話者がその言語形式に付随する象徴的意味に価値を見いだしているからである。東京方言を好んで使用する話者は東京文化に価値を見いだしているのであり、関西方言を好んで使用する話者は関西文化に価値を見いだしているのである。たとえば、無アクセント域の茨城において東京アクセントをよく

使用する話者は、東京が好きで衣服やおしゃれの流行性に高い価値観を見いだしている流行志向の話者であった(早野 1996)。そして地域性の強い伝統方言形をよく使用している話者は反革新的で用心深い保守地元志向の話者であった(早野 2002)。この志向性とは、自己のアイデンティティをどの文化に求めているかということである。

7. おわりに

今回の調査では5パターンの混交形が確認できた。他地域の表現形式をそのまま取り入れるのではなく、中間形を創り出して使用しているのである。このことから、東京的であるが西日本的でもある文化(標準・関西混交方言形)、関西的であるが地元的でもある文化(関西・伝統混交方言形)といった中間的な文化に都城の若年層は自己のアイデンティティを見いだしていると考えられる。

【注】

1) 都城調査に合わせて地域差に関する調査を宮崎県南部の高年層(60代以上)を対象に行った。調査地域は次の通りである。なお、調査は筆者の他、宮崎大学院生の重信吉秀、永田剛、比和谷恭子、川内賢幸、浅賀知絵、坂本理恵、愛木佳代、満石貴美子、岩切沙知が参加した。

宮崎市(3地点)、小林市(1地点)、えびの市(1地点)、日南市(4地点)、串間市(4地点)、山之口町(現都城市)(1地点)、高崎町(現都城市)(2地点)、高城町(現都城市)(2地点)、三股町(1地点)、高原町(2地点)、野尻町(1地点)、綾町(1地点)、高岡町(現宮崎市)(1地点)、国富町(1地点)、田野町(現宮崎市)(1地点)、清武町(1地点)、佐土原町(現宮崎市)(2地点)、北郷町(1地点)、南郷町(2地点)、須木村(1地点)。

2) 2006年に旧山之口町、旧高崎町、旧高城町が都城市と合併した。調査地域は合併前の旧都城市。

3) 九州方言学会編(1969:p.162-p.163)では、明治20－30年代に生まれた話者と昭和20年代に生まれた話者を対象に指定の助動詞について調査している。明治話者の調査結果では、ヤを使用している話者は福岡や長崎にほんの少数いるだけであり、宮崎では全域がジャである。しかし、昭和話者の調査結果ではヤは福岡、佐賀、長崎でのもっとも優勢な形式となっており、鹿児島にも使用者がいる。大方言(関西方言)化が起きていることが確認できる。

4) 日向方言でもヨカは使用されていたが、今回の地域差調査においては、ほとんど使用者が確認できなかった。つまり、ヨカは都城伝統方言形であり、ヨカッチャネは都城伝統方言形と日向伝統方言形の混交形である。この項目は共通語化の度合いによって新たな地域差が生まれている例といえる。この地域差に関しては機会を改めて報告する。

5) 首都圏の若年層ではアクセントを平板化させて～クナイ↗という形式で推量を表す話者が多く、ヘンクナイ↗(変じゃない?)、キレークナイ↗(きれいじゃない?)のような新方言形が盛んに使われており(早野 1996:p86-p.87)、この影響も十分に考えられる。今回の調査では、平板式でヨクナイ↗と発音した話者もおり、ここではヨクナイを方言形として扱う。

6) 鎌田(1981)では、関西における指定の助動詞「ヤ」や疑問の終助詞「ケ」が周辺地域に伝播している現象を地方共通語化としている。「ヤ」や「ケ」を全国共通語と意識している話者はいないであろうから、柴田(1978)や井上(1985)における地方共通語とは違う概念である。

【参考文献】

井上史雄(1985)『新しい日本語ー《新方言》の分布と変化ー』明治書院
井上史雄(1994)『方言学の新地平』明治書院
加藤正信、松永修一編(2003)『宮崎県方言における世代差・地域差』科研費報告書
鎌田良二(1981)「関西における地方共通語について」『国語学』126
九州方言研究会編(1969)『九州方言の基礎的研究』風間書房
真田信治(1993)「方言」『国語学ー解釈と教材ー』38-12
柴田武(1978)『社会言語学の課題』三省堂
陣内正敬(1988)「言語変種とスピーチスタイル」『日本語学』7-3
東條操(1954)「序説」『日本方言学』吉川弘文堂
早野慎吾(1996)『首都圏の言語生態』おうふう
早野慎吾(1997)「茨城県玉造町の言語変化」『Ars Linguistica』4
早野慎吾(2002)「首都近郊都市における方言形の分類」『地域語研究論集』港の人
早野慎吾(2005)「方言コンプレックスのメカニズム」『Ars Linguistica』12
早野慎吾他(2006)「都城方言の言語動態」第22回九州方言研究会発表資料
宮崎国際大学地域言語研究会編(1998)『宮崎県言語地図集』

〔付記〕
都城調査では都城市役所、ＪＡ都城、都城西高等学校、都城農業高校の方々にご協力いただいた。特に都城市役所ウェルネス課の方々にはお世話になった。記して感謝申し上げる。